

実践報告

地域におけるジュニアスポーツの現状と課題 —親対象のアンケート調査から—

井梅 由美子¹⁾・大橋 恵²⁾・藤後 悦子³⁾

The Present State and Challenges of Community-Based Junior Sport Clubs:
Discussion Based on a Questionnaire Survey Among Parents of Club Members

Yumiko Iume, Megumi M. Ohashi and Estuko Togo

Abstract

We investigated the problems faced by community-based junior sports clubs in Japan from the perspective of club members' parents. Using an online survey, we targeted 300 fathers and 600 mothers of children who participate or used to participate in team sports. We coded the descriptive data, and extracted four major categories ("coach" "team policy," "parental involvement" and "environmental factors"). We then formulated sub-categories for each of these major categories, and extracted a total of 23 sub-categories, including "no / don't know" and "other." The major category containing the largest number of codes was "parental involvement," which accounted for 26.0% of all codes. We conducted a chi-square test on sport type by gender of parents. The test indicated that many of the mothers' statements pertained to issues like "the burden of parental duty" and "relationships among parents." Fathers, on the other hand, were significantly more likely to mention factors like "coach" and "weak team." Regarding types of sports, statements pertaining to "the burden of parental duty" were more frequent regarding baseball.

Keywords: community-based junior sports club, parents, online survey

1. 問題と目的

昨今、都心部では特に、子どもたちが遊びの一環として自由に身体を動かしたり、走り回ったり、スポーツをしたりする場が減少している。空き地はおろか、本来、子どもたちがのびのびと遊べるはずの公園な

どでも、球技等を禁止している場所も多く、子どもたちが自由に集まってスポーツをするような場はほとんど少なくなっているのが現状である。

一方で、子どもたちの体力や運動能力の低下はずっと問題にされてきている。例えば、毎年度文部科学省が行っている体力・運動能力調査によれば、子どもの体力や運動能力は1980年代に比べて低い状態が続いている（文部科学省，2014）。加えて、近年、積極的にスポーツをする子どもとそうでない

1) 井梅由美子 東京未来大学こども心理学部
2) 大橋 恵 東京未来大学こども心理学部
3) 藤後 悦子 東京未来大学こども心理学部

子どもの二極化が顕著に認められることも指摘されている（文部科学省，2012）。

文部科学省が平成20年度から3年間かけて行った全国体力・運動能力、運動習慣等調査において（文部科学省，2012）、1週間の総運動時間を算出した結果によると、特に中学生（中学2年生を対象に調査）においては、男女とも、運動やスポーツの実施時間が1週間に60分未満の生徒の割合が最も多い一方で、300分前後を底としたU字を描き、総運動時間が900分前後を頂点とした分布が見られており、運動時間の二極化が顕著である。これは、運動部活動に所属するか否かによって中学生の運動の機会が大幅に左右されることが推測される。一方、小学生（小学5年生を対象に調査）でも、中学生ほど顕著ではないものの、運動時間の差がかなりあることが明らかにされている。同調査にて、運動部やスポーツクラブへの所属状況について、小学生男子では72.0%が何らかの運動クラブに所属しており、女子では48.6%が所属しているという結果が得られている。また、運動部やスポーツクラブ等への所属している群は所属していない群に比べて、体力合計点が高いという結果も得られており、現在の小学生にとって、定期的に身体を動かす機会となるスポーツの習い事やスポーツチームに所属することは、体力低下を防ぐ上でも重要といえるであろう。

ところで、小学生のスポーツの習い事情はどのようであろうか。3歳～17歳の子どもの持つ母親15,450名を対象とした調査によると、日本では、70%程度の小学生が学校外において何らかのスポーツ活動を行っており、その内容は、1位がスイミング、2位がサッカー、3位が野球となっている（鈴木，2009）。この上位3種目のうち、スイミングは主に月謝を支払い、専門の指導者に指導を受けるという習い事形式であることが多いと考えられる。一方、サッカーと野球については、月謝等のあるクラブチームやスクール等でプレーしている場合もあれば、ボランティアで運営される地域スポーツクラブに所属している子どもも多いであろう。また、その他にも、

体操教室や、空手、ダンス教室、テニス、バスケットボール、スキー/スノーボード、陸上など（先ほどの鈴木，2009の調査の4位～10位）、小学生のスポーツ活動は、多様な広がりを見せている。しかし一方で、これらの習い事としてのスポーツは費用がかかる面での懸念もあり（大橋・井梅・藤後・川田，2017）、年収の高い保護者の子どもほど定期的に運動をしていることなども示されている（佐藤，2009）。

そのような小、中学生の子どもたちがスポーツに親しむ場として、地域で行われているボランティア主体のスポーツクラブの存在は大きい。こうしたスポーツクラブは、いわゆる地域スポーツと呼ばれるもので（大橋・藤後・井梅・川田，2016）、その代表的な団体は、日本体育協会により1962年に創設されたスポーツ少年団がある。これは、学区内の地域に住む少年・少女が自由時間にスポーツ活動を中心とした集団的な活動を経験できる団体を指す（日本体育協会日本スポーツ少年団，2016）。その地域のボランティア指導者に支えられており、小学生以上の子どもなら男女問わず誰でも参加することができることが基本である。費用の面でも、必要経費プラス会費程度と比較的安価であることが多い。地域によってある程度差はあるものの、サッカー、野球、バスケットボール、バレーボールなどの種目が、放課後や週末、近くの小学校のグラウンドや体育館を使って行われていることが多いことから、参加するために遠くから通う必要もない。こうした地域スポーツは、多くの子どもたちにとって参加しやすく、子どもたちが学校の授業外で日常的に運動できる場として、大変有効な場であるといえよう。

しかし、その一方で、地域スポーツはその運営自体がボランティアであることから、保護者が子どものスポーツと一緒に関わることも多い（藤後・川田・井梅・大橋，印刷中）。加えて、小学生であることから、中学生の部活動のように、活動の主体を子どもたちで行うことも難しい。小学生を対象とした地域スポーツにおける親の役目は、当番、試合等の送迎、付添い、応援など数多くあり、親は、コーチ、

観客、管理者として子どもに関わっている (Smoll & Smith, 2002)。

また、小学生の地域スポーツのコーチを対象とした調査では (大橋ほか, 2017)、コーチたちが活動の中で「嫌だ・困った」と感じることにについて自由記述法にて聞いており、最も多くあげられていたのが、子どもとの関係や指導の問題よりも、保護者との関係についてであった。内容については、例えば、「熱心すぎて干渉する保護者」、その逆に、「関心が薄く、あまり応援にも来ない保護者」などが見られている。こうした調査結果からも、小学生を対象とした地域スポーツでは、保護者の関与がかなり大きいことが推測され、コーチの視点からは、対保護者の問題が一番コーチを悩ませているようである。

それでは、地域スポーツに参加させている保護者は、地域スポーツの現状をどのように感じているのであろうか。本研究では、クラブメンバーの親の視点から、小学生を対象とした地域スポーツクラブが直面する問題について調査した。なお、本研究では、地域スポーツのうち、レギュラー争いが生じたり、勝敗には個人の能力だけでなくメンバーのチームワークが必要となるチームスポーツに焦点をあてて検討していくこととする。

2. 方法

(1) 調査対象者

インターネット調査会社に委託し、オンライン調査を実施した。調査対象は小学校4年生～高校生の子どもを持つ父親300名 (平均年齢46.9歳, 31歳から68歳, $SD=5.24$), および母親600名 (平均年齢44.4歳, 29歳から58歳, $SD=5.00$) である。本研究では小学生のチームスポーツに子どもを所属させた経験のある保護者に、その経験を踏まえて回答してもらうため、条件として、子どもが学校外の活動としてチームスポーツに所属している、あるいは子どもが小学生時に所属していた人に限定した。なお、その範囲を小学校4年生から高校生としたのは、小学校低学年ではチームに所属している年数が浅く、

なおかつ、当番活動やレギュラー争いなどの経験が少ない可能性も多いことを想定し、それらの問題が多くなるであろう高学年に限定した。さらに、上限については、過去の経験を思い出してもらうにあたって年数が経ちすぎないことを考慮し、高校生までとした。

(2) 調査内容

a) 調査対象者の属性

回答者の年齢および性別、居住地、就労状況等について尋ねた。

b) チームスポーツに参加している子どもの属性

チームスポーツに参加している (していた) 子どもの性別、および子どもがチームに所属していた期間について尋ねた。なお、チームスポーツに所属している子どもが複数いる回答者のために、「複数のお子様がいる場合は、チーム内での人間関係についてより強く思い出すお子様についてお答え下さい」と指示し、以下の質問についても、その子どもについての回答を求めた。

c) 参加スポーツの種類

子どもが参加している (あるいは、小学生時に参加していた) スポーツの種類について尋ねた。スポーツ少年団の登録団体数の多い種目は、「サッカー」、「軟式野球」、「バスケットボール」、「バレーボール」、「剣道」の順となっていることから (笹川スポーツ財団, 2014)、個人競技の「剣道」を除く4種目を地域におけるチームスポーツの主な種目と考え、尋ねることとした。「サッカー (地域)」、「サッカー (クラブチーム)」、「野球 (地域)」、「野球 (クラブチーム)」、「バスケットボール (地域)」、「バスケットボール (クラブチーム)」、「バレーボール (地域)」、「バレーボール (クラブチーム)」、「その他 (ドッチボール、ラグビー、新体操の団体戦等)」のうち、一つ選択するよう求めた。

d) 地域スポーツの問題点

地域スポーツの問題点として考えられることについて、自由記述方式で回答を求めた。具体的には、「地域スポーツ (クラブチーム含む) の問題点とはどの

ようなものですか?」と尋ねた。

e) チームレベルと子どもの競技レベル

チームレベルについては「県(都・道・府)大会出場レベル以上」、「地区大会上位レベル」、「地区大会中位レベル」、「それ以下」の4つのうち、最もあてはまるものを選んでもらった。また、個人の競技レベルについては、「レギュラー/スタメン」、「準レギュラー」、「補欠」、「それ以下」の4つのうち、最もあてはまるレベルの選択を求めた。

3. 結果と考察

(1) 調査対象者の基本的属性

はじめに、回答者本人(チームスポーツに参加している子どもの親)の性別と、スポーツに参加している子どもの性別の組み合わせを表1に示す。チームスポーツに参加している子どもの性別は、男子が

657名、女子が243名となっており、男子の方が多いことが分かる。なお、回答者本人が父親であるか母親であるかの違いによる、チームスポーツに参加している子どもの性別に有意な差はなかった。

また、回答者の居住地について、北海道・東北地方の回答者が125名(13.9%)、関東地方の回答者が304名(33.8%)、中部地方が153名(17.0%)、関西地方が175名(19.4%)、中国地方が44名(4.9%)、四国地方が23名(2.6%)、九州・沖縄地方が76名(8.4%)となっている。

次に、子どもが参加するチームスポーツの種類、およびクラブチームであるか、地域スポーツであるかの内訳について、子どもの性別ごとに表2に示す。各種目の参加人数を見てみると、男子はサッカーに参加している子どもが最も多く(41.4%)、次いで野球が多い(33.2%)。女子では、バスケットボールが

表1 回答者および子どもの性別

		子の性別		合計
		男子	女子	
回答者	父親	222	78	300
性別	母親	435	165	600
合計		657	243	900

表2 スポーツの種類

スポーツ種別	男子		女子		合計	
	度数	%	度数	%		
サッカー	272	(41.4)	16	(6.6)	288	(32.0)
野球	218	(33.2)	6	(2.5)	224	(24.9)
バスケットボール	38	(5.8)	75	(30.9)	113	(12.6)
バレーボール	5	(0.8)	50	(20.6)	55	(6.1)
その他	124	(18.9)	96	(39.5)	220	(24.4)
チーム形態						
地域スポーツ	377	(57.4)	104	(42.8)	481	(53.4)
クラブチーム	156	(23.7)	43	(17.7)	199	(22.1)
その他	124	(18.9)	96	(39.5)	220	(24.4)

最も多く (30.9%)、次いでバレーボールとなっている (20.6%)。ただし、女子の場合、その他が多いことから (39.6%)、女子が参加しているスポーツはより多様であることが推測される。また、クラブチームと地域スポーツの割合を見てみると、地域スポーツに参加している子どもは男子では57.4%、女子では42.8%であり、クラブチームに参加している子どもは男子23.7%、女子17.7%であることから、男女ともに、クラブチームよりも地域スポーツに参加している割合が高いことがわかる。

さらに、回答者の居住地と子どもの参加しているスポーツの種類について示したものが表3である。 χ^2 検定を行ったところ有意であった ($\chi^2=46.56$, $df=24$, $p<.01$)。残差の検討を行い、網がけの部分に有意な差が見られた。野球とバレーボールに地域差が見られ、野球では、関東地方での参加人数がやや多く (29.3%)、中国地方での参加人数が少ない (11.4%) ことが分かる (全体24.9%)。バレーボールについては、関東地方での参加人数が少なく (2.6%)、関西地方では多い (12.0%) ことが分かる (全体6.1%)。

なお、今回の調査結果は、オンライン調査への協力者により得られたデータであり、この結果が各地域で行われているスポーツの比率を示すものではないことを断っておく。

(2) 保護者が指摘する地域スポーツの問題点

地域スポーツの問題点 (クラブチーム含む) についての自由記述内容について、著者らで内容を確認し、コーディング表を作成した。そのコーディング表に基づき、著者 (A) および、仮説を知らない2人 (B、C) の計3人のコーダーが独立してコーディングを行った。コーディングの結果、初期の一致率は、それぞれ2者間において、83.4%、77.4%、75.1%であったことから、一致率の高かった2者 (AB) のコーディングを基本とし、この2者間で一致しなかった回答については、3人目のコーダー (C) の回答を確認し、最終的なコーディングを決定した。なお、回答の中に複数の内容が記述されていた場合は、原則、始めに書かれていた内容を採用し、コーディングを行った。

コーディングの内容は表4に示す通りである。記

表3 回答者の居住地とスポーツの種類

	北海道 ／東北	関東	中部	関西	中国	四国	九州 ／沖縄	合計
サッカー	32 (25.6%)	104 (34.2%)	45 (29.4%)	64 (36.6%)	11 (25.0%)	6 (26.1%)	26 (34.2%)	288 (32.0%)
野球	34 (27.2%)	89 (29.3%)	36 (23.5%)	42 (24.0%)	5 (11.4%)	5 (21.7%)	13 (17.1%)	224 (24.9%)
バスケットボール	19 (15.2%)	38 (12.5%)	23 (15.0%)	15 (8.6%)	9 (20.5%)	2 (8.7%)	7 (9.2%)	113 (12.6%)
バレーボール	7 (5.6%)	8 (2.6%)	10 (6.5%)	21 (12.0%)	4 (9.1%)	1 (4.3%)	4 (5.3%)	55 (6.1%)
その他	33 (26.4%)	65 (21.4%)	39 (25.5%)	33 (18.9%)	15 (34.1%)	9 (39.1%)	26 (34.2%)	220 (24.4%)
合計	125 (100.0%)	304 (100.0%)	153 (100.0%)	175 (100.0%)	44 (100.0%)	23 (100.0%)	76 (100.0%)	900 (100.0%)

表4 地域スポーツの問題（父母別）

	全体		父親（N=300）		母親（N=600）	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
なし、わからない	210	(23.3%)	86	(28.7%)	124	(20.7%)
コーチ全般	9	(1.0%)	6	(2.0%)	3	(0.5%)
コーチの暴言・えこひいきなど	42	(4.7%)	11	(3.7%)	31	(5.2%)
コーチに関する内容						
指導者と親の価値観のずれ	16	(1.8%)	5	(1.7%)	11	(1.8%)
親がコーチをしていること	17	(1.9%)	2	(0.7%)	15	(2.5%)
指導者不足	32	(3.6%)	16	(5.3%)	16	(2.7%)
指導者の指導力不足	38	(4.2%)	15	(5.0%)	23	(3.8%)
チームの方針						
勝利至上主義	19	(2.1%)	9	(3.0%)	10	(1.7%)
チームが弱い	12	(1.3%)	8	(2.7%)	4	(0.7%)
能力のばらつき	25	(2.8%)	8	(2.7%)	17	(2.8%)
親の関わり						
親の関わり全般	16	(1.8%)	2	(0.7%)	14	(2.3%)
親の当番等の負担	97	(10.8%)	16	(5.3%)	81	(13.5%)
（親同士の）人間関係	42	(4.7%)	7	(2.3%)	35	(5.8%)
親の過干渉	79	(8.8%)	20	(6.7%)	59	(9.8%)
環境的要因						
環境的要因全般	27	(3.0%)	10	(3.3%)	17	(2.8%)
子どもの人数の不足	62	(6.9%)	27	(9.0%)	35	(5.8%)
練習場所の不足	20	(2.2%)	3	(1.0%)	17	(2.8%)
コスト（お金がかかる）	26	(2.9%)	13	(4.3%)	13	(2.2%)
練習時間が短い	7	(0.8%)	1	(0.3%)	6	(1.0%)
練習時間が長い	14	(1.6%)	4	(1.3%)	10	(1.7%)
ボランティアゆえの限界	18	(2.0%)	7	(2.3%)	11	(1.8%)
子ども同士の問題						
子ども間トラブル	9	(1.0%)	1	(0.3%)	8	(1.3%)
その他	63	(7.0%)	23	(7.7%)	40	(6.7%)

述内容から、大きく4つのカテゴリーに分類した。1つ目は、コーチの暴言や指導姿勢の問題や、コーチと親との見解の違い、あるいは、親がコーチをしていることなど「コーチに関する内容」についてまとめた。

2つ目は、「勝つために気持ちは二の次」など勝利至上主義であることや、その反対に「仲良しクラブで強さを追及できない」などチームの弱さに言及している記述、あるいは、「力の差が大きい」、「レベルがばらばら」など、チーム内での能力のばらつきの大きさを指摘しているものなどを1つのカテゴリーとし、「チームの方針」とした。

3つ目には、親の当番等の負担や、親同士の人間関係、さらには、「子どものことなのに親が介入し過ぎる」「親が口を出し過ぎる」など親の過干渉な態度などが見られ、これを「親の関わりの問題」とした。

4つ目には、「メンバーが集まらない」など子どもの人数の不足や、練習場所の不足、コスト面での問題などの記述が見られ、これを「環境的要因」としてまとめた。この4カテゴリーを柱とし、その内容について、それぞれ小カテゴリーを設けた。さらに、問題点について「なし、わからない」と答えているもの、子ども同士のトラブルについての記述、その他どれにも当てはまらないものの3つを上述の4カ

テゴリーとは別に設け、コーディングを行った。

分類したカテゴリーのうち、900名全体で最も多かった回答を見ていくと、大カテゴリーで最も多かったのは「親の関わりの問題」で26.0%である。次に多かったのは、地域スポーツの問題点について「なし、わからない」と答えている回答である(23.3%)。そして、「環境的要因」(19.3%)、「コーチに関する問題」(17.1%)と続く。さらに小カテゴリーについて見ていくと、「親の当番等の負担」が10.8%と最も多く、次いで「親の過干渉」についての記述が8.8%となっており、2番目に多い。

これらの結果から、地域スポーツの困難として、保護者の視点から最も多くあげられる内容が、親の関わりの問題であることがわかる。その中でも特に、「親の当番等の負担」は全体の1割を超える人があげていた。具体的な内容としては、「お茶当番や配車など親の当番の問題」、「親が手伝うのが当たり前になっている。コーチのお弁当を作ったり差し入れをしたり金銭的な負担も多い」などがあり、当番と試合等の送迎(配車)については多くの保護者が言及していた。ベネッセ教育総合研究所が実施した調査では(佐藤, 2014)、親の応援や手伝いが負担という回答の割合が高いものは、野球(68.5%)、サッカー(58.8%)、バスケットボール(55%)であり、集団スポーツで高くなる傾向を指摘している。今回の調査でもこれらの種目に参加している人は多く、チームスポーツ、集団スポーツでは応援や手伝い等の負担が欠かせないといえよう。さらに、「他の家族に影響が出る」、「親がかかりきりにならないと出来ない。他の子の事が後回しにせざるをえない」など、スポーツに参加している子ども以外の家族への影響について言及している回答もしばしば見られた。地域スポーツに参加することによる負担感がかなり高いことがわかる。

また、親の関わりについて2番目に記述が多かったのが、「親の過干渉」についてである。具体的内容については、「親が関わりすぎ」、「親が子供への関心が強すぎる」、「親がのめり込みすぎ」などの回

答が目立った。こうした回答は親子の心理的距離の近さや、本来、子どもの活動であるはずところを親が一喜一憂するといった親の子どもへの同一化現象が起きているようにも見られ、心理的にも保護者の影響が強いことが伺われる。

「環境的要因」については、「子どもの人数の不足」について6.9%の人が触れており、「人数が年々少なくなっている」、「子どもが少なくてチームの存続があやうい」、「少子化で他の地区との合併をしなければ成り立たなくなっている」などの回答が見られた。児童数の減少により地域スポーツの存続自体が危うくなっている地域もあることが推測される。一方、「スポーツの多様化に伴い、なかなか人数が集まらない」などの意見も見られ、種目の多様さが一つのチームに子どもが集まらない原因にもなっているようだ。

また、「コーチに関する内容」のうち、もっとも多く見られたものが、「コーチの暴言・えこひいき」(4.7%)である。「コーチが小学生相手に怒鳴りちらす」「監督のワンマンになってしまう」などの記述が見られた。コーチ対象の調査においても(大橋ほか, 2017)、他のコーチの暴言、感情的にどなることなどが気になる点としてあがっており、多くのコーチが子ども本位に活動している中で、一部、コーチの指導方法に関する問題も見られた。同調査で、コーチの有資格者は15%程度であることも分かっており、また、子どもの心身の発達についての知識に不足を感じているコーチも多いことから(大橋ほか, 2016)、地域スポーツのコーチを支援するプログラムや研修等について、検討することも必要であろう。

(3) 回答者の属性の違いによる地域スポーツの問題点の違い

以下には、回答者の属性別(性別、スポーツの種目別、その他)に、地域スポーツの問題点としてあげている内容に偏りがあるか否かを検討する。

回答者の性別による問題点としてあげるの違いを検討した(表4)。 χ^2 検定を行った結果、有意であった($\chi^2=63.10$, $df=22$, $p<.01$)。残差の検討を行ったところ、網がけの部分に有意な差が見られた。

地域スポーツの問題点について「なし、わからない」と答えた割合は父親に多く、また、コーチに関する問題をあげているのも父親の方が多かった（「コーチ全般」と「指導者不足」でそれぞれ有意）。さらに、「チームの方針」について、「チームの弱さ」を問題点としてあげている回答も父親の方に多かった。一方、「親の関わりの問題」については、母親の方が回答している人の割合が多く、「親の当番等の負担」および、「（親同士の）人間関係」の2つのカテゴリーで、父親よりも母親の方が問題点として多くあげていることが分かった。

これらの結果から、母親の方が、「親の関わりの問題」を地域スポーツの困難として感じていることがわかる。これは、当番等は母親の方が実質的に関わるが多いためと推測される。一方、父親の言及が多かった内容は「コーチに関する内容」や「チームが弱い」ことなど、スポーツの内容に関わる部分で問題点を感じているのであろう。また、問題点を「なし、わからない」と答えている割合も父親に多く、そもそものコミットメントの違いとも考えられる。

次に、スポーツの種目別に問題点の記述に差があるかを検討した。はじめに、チームの形態（地域スポーツかクラブチームか）によって何らかの回答の偏りがあるかを検討するため、 χ^2 検定を行ったが、有意ではなかった。そこで、チーム形態の違いでは分

けず、スポーツの種目（サッカー、野球、バスケットボール、バレーボール、その他の5種目）での検討を行った。その際、小カテゴリーでは各セルの人数が少なくなり、期待度数が5未満のセルがいくつも出てしまうため、大カテゴリーでの検討を行ったところ、有意な偏りが見られた（ $\chi^2=34.56$, $df=16$, $p<.01$ ）。結果を表5に示す。残差の検討を行ったところ、問題点が「なし、わからない」と答えている種目は、野球において少なかった（15.0%）。「コーチに関する内容」の偏りについては、野球に多く（23.7%）、その他（13.1%）で少ないこと分かった。さらに、「親の関わりの問題」についてあげている人は、野球で多く（35.7%）、バスケットボールで少ない（19.8%）ことが分かった。

これらの結果から、チームの形態よりも、スポーツの種類ごとの特性によって、保護者が問題と感じる点が違うことが分かる。今回の調査の結果からは、4つの種目のうち、野球に参加している保護者は他の種目に比べて、問題点を多く指摘していることがわかった。ベネッセ教育総合研究所の調査でも（佐藤, 2014）、親の応援や手伝いへの負担感が最も高いのは野球であり、野球は種目の性質上、手伝い等の負担が物理的に多いのかもしれない。しかし、今回は保護者の自由記述の内容から様々な問題の頻度について推測したもので、それぞれの内容を数量的

表5 地域スポーツの問題点（スポーツ種目別）

		サッカー	野球	バスケット ボール	バレーボール	その他	合計
なし、わからない	N	79	31	32	11	57	210
	(%)	(29.6%)	(15.0%)	(30.2%)	(22.0%)	(28.8%)	(25.4%)
コーチに関する内容	N	51	49	19	9	26	154
	(%)	(19.1%)	(23.7%)	(17.9%)	(18.0%)	(13.1%)	(18.6%)
チームの方針	N	21	9	11	3	12	56
	(%)	(7.9%)	(4.3%)	(10.4%)	(6.0%)	(6.1%)	(6.8%)
親の関わりの問題	N	70	74	21	16	53	234
	(%)	(26.2%)	(35.7%)	(19.8%)	(32.0%)	(26.8%)	(28.3%)
環境的要因	N	46	44	23	11	50	174
	(%)	(17.2%)	(21.3%)	(21.7%)	(22.0%)	(25.3%)	(21.0%)

表6 地域スポーツの問題点（所属チームの競技レベル別）

	上位 (N=450)		下位 (N=450)		
	度数	(%)	度数	(%)	
	なし、わからない	86	(19.1%)	124	(27.6%)
コーチに関する内容	コーチ全般	4	(0.9%)	5	(1.1%)
	コーチの暴言・えこひいきなど	23	(5.1%)	19	(4.2%)
	指導者と親の価値観のずれ	6	(1.3%)	10	(2.2%)
	親がコーチをしていること	10	(2.2%)	7	(1.6%)
	指導者不足	20	(4.4%)	12	(2.7%)
	指導者の指導力不足	19	(4.2%)	19	(4.2%)
	チームの方針	勝利至上主義	14	(3.1%)	5
チームが弱い		3	(0.7%)	9	(2.0%)
能力のばらつき		15	(3.3%)	10	(2.2%)
親の関わりの問題	親の関わり全般	6	(1.3%)	10	(2.2%)
	親の当番等の負担	47	(10.4%)	50	(11.1%)
	(親同士の) 人間関係	24	(5.3%)	18	(4.0%)
	親の過干渉	54	(12.0%)	25	(5.6%)
環境的要因	環境的要因全般	13	(2.9%)	14	(3.1%)
	子どもの人数の不足	34	(7.6%)	28	(6.2%)
	練習場所の不足	11	(2.4%)	9	(2.0%)
	コスト（お金がかかる）	13	(2.9%)	13	(2.9%)
	練習時間が短い	1	(0.2%)	6	(1.3%)
	練習時間が長い	8	(1.8%)	6	(1.3%)
	ボランティアゆえの限界	7	(1.6%)	11	(2.4%)
子ども同士の問題	子ども間トラブル	3	(0.7%)	6	(1.3%)
	その他	29	(6.4%)	34	(7.6%)

に尋ねたわけではない。今後さらなる検討が必要であろう。

さらに、子どもの競技レベル、および所属するチームの競技レベルの違いによって、記述に差があるかを検討した。子どもの競技レベルについては「レギュラー/スタメン」(517名)、非レギュラー（「準レギュラー」、「補欠」、「それ以下」合わせて383名）の2群に分けた。チームの競技レベルについては、上位チーム（「県（都・道・府）大会出場レベル以上」、「地区大会上位レベル」合わせて450名）、下位チーム（「地区大会中位レベル」、「それ以下」合わせて450名）の2群に群分けし、検討した。その結果、子どもの

競技レベルにおける差は認められなかったものの、チームの競技レベルの違いによって、いくつかの項目で差が見られた。

チームの競技レベルと自由記述の内容について、 χ^2 検定を行った結果を表6に示す（ $\chi^2=38.72$, $df=22$, $p<.05$ ）。残差の検討を行ったところ、問題が「なし、わからない」の回答は、下位チームに多く見られた。また、「チームの方針」については、「勝利至上主義」への言及が上位チームの方に多く、「親の関わりの問題」の「親の過干渉」についても、上位チームの方が言及されていることが多かった。「勝利至上主義」はやはり上位チームの方に多く見られ、

親の干渉も多くなるということであろう。

最後に、スポーツに参加している子どもの性別、および回答者の居住地域による違いについて検討したが、いずれも有意な偏りは見られなかった。

注) 本研究は平成26～28年度日本学術振興会科学研究費補助金(萌芽研究)(代表:藤後悦子 課題番号・26590166)の助成を受けて行われた。

5. 文 献

文部科学省 2012 子どもの体力向上のための取組ハンドブック http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1321132.htm (2016年9月30日)

文部科学省 2014 平成24年度体力・運動能力調査結果の概要及び報告書について http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1340101.htm (2016年09月30日)

日本体育協会日本スポーツ少年団 2016 ガイドブック「スポーツ少年団とは」公益財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団 <http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/syonendan/doc/H28guidebook.pdf> (2016年09月30日)

大橋恵・井梅由美子・藤後悦子・川田裕次郎 2017 地域におけるスポーツのコーチの喜びと困惑—コーチ対象の調査の内容分析— コミュニティ心理学研究

大橋恵・藤後悦子・井梅由美子・川田裕次郎 2016 地

域スポーツの指導者が直面している課題—指導者の指導力向上に向けて— スポーツ産業学研究 26 243-254.

笹川スポーツ財団 2014 スポーツ白書2014 笹川スポーツ財団

佐藤昭宏 2014 保護者の「負担感」から考える、子どものスポーツの習い事 ベネッセ情報センター教育ニュース <http://benesse.jp/blog/20140312/p2.html> (2016年9月30日)

佐藤暢子 2009 子どもの「運動格差」を生じさせるものは何か? 第1回 学校外教育活動に関する調査 <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=3264> (2016年09月30日)

Smoll, F. L. & Smith, R. E. 2002 *Children and youth in sport*. St. Louis: Kendall/Hunt. (市村操一・杉山佳生・山本裕二(監訳) 2008 ジュニアスポーツの心理学 大修館書店.)

鈴木尚子 2009 小学生の塾や習い事(前篇)—4年生からスポーツより勉強 第1回 学校外教育活動に関する調査 http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikuhi/webreport/pdf/houkoku_06.pdf (2016年09月30日)

藤後悦子・川田裕次郎・井梅由美子・大橋恵 印刷中
小学生の地域スポーツにかかわる親のスポーツ・ペアレンティング コミュニティ心理学研究

(いうめ ゆみこ・おおはし めぐみ・
とうご えつこ)

【受理日 2016年10月26日】